

残差に基づく有限要素法の数値解 補正法の検討

Numerical solution of the Finite Element Method based on residuals
considerations on the correction method

筑波大学 理工情報生命学術院
システム情報工学研究群
構造エネルギー工学学院プログラム

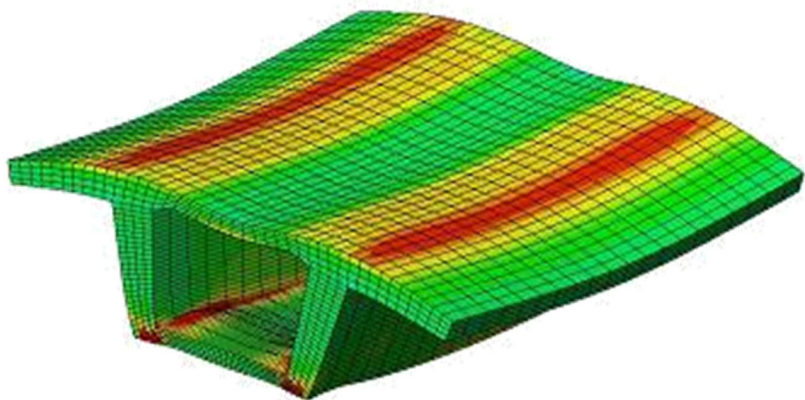
YU HUAIZHI

指導教員：山本亨輔 助教
松島亘志 教授
アランニャ クラウス デ カステロ 助教

有限要素法

FEM
Finite Element Method

FEMとは微分方程式の数値解法



離散化

$$u(x) = \mathbf{u} \cdot \mathbf{N}(x)$$

連続関数

離散点の解
(数値解)

基底
(補間関数)

内積

連立方程式化

$$\frac{\partial u}{\partial t} + c \frac{\partial u}{\partial x} = 0$$

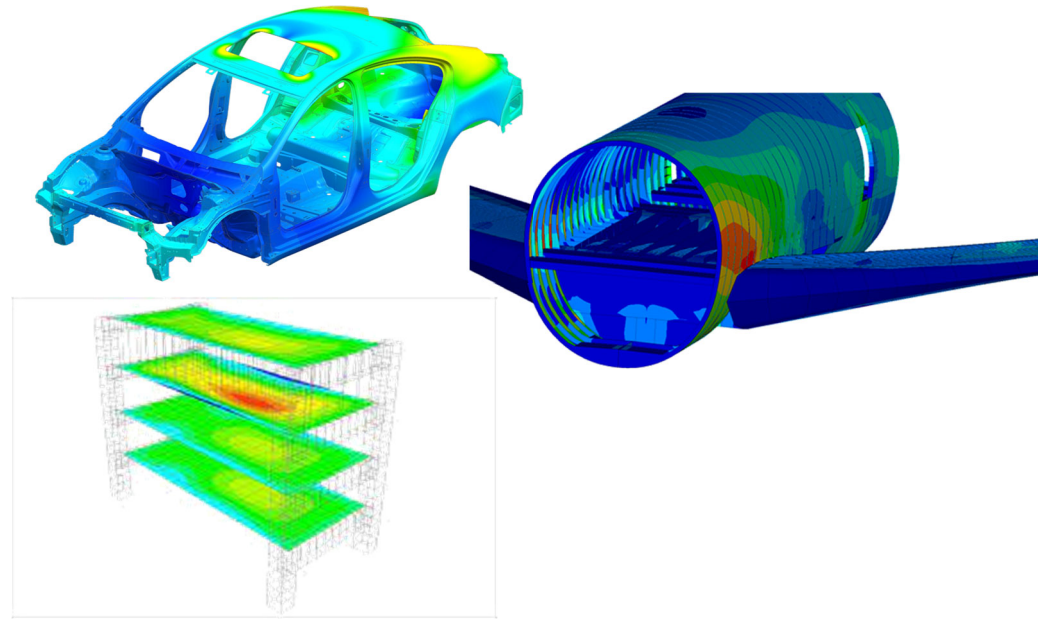


$$[\mathbf{A}]\{\mathbf{u}\} = \{\mathbf{b}\}$$

背景

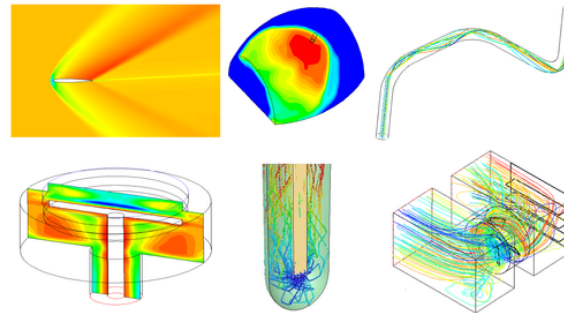
最小ポテンシャルエネルギー

自動車
航空機
建築物



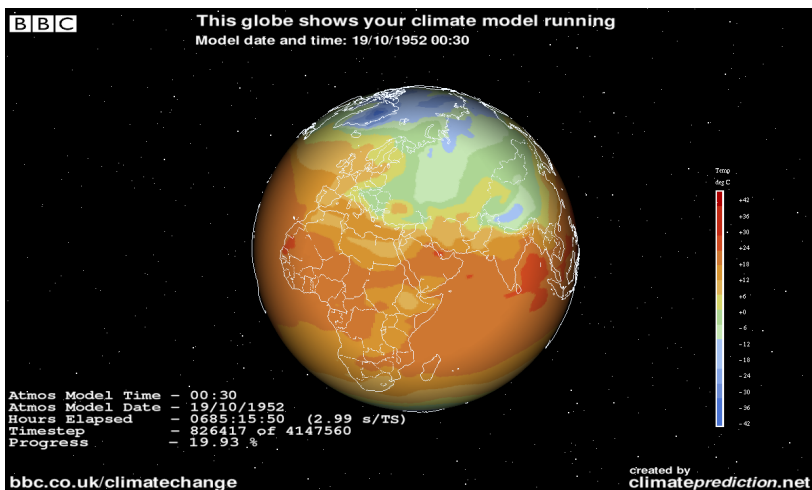
重み付き残差法

熱
流体
電磁場



引用：
<https://www.plm.automation.siemens.com/global/ja/webinar/cae-vehicle-structural-analysis-process/69036>
Altair for Aerospace: simulation modeling, design optimization, implicit, explicit, electromagnetic, multi-body dynamics
<http://furui-kozo.com/analysis.html>
<https://www.rccm.co.jp/product/fluid/ansys-fluent/>

大規模計算

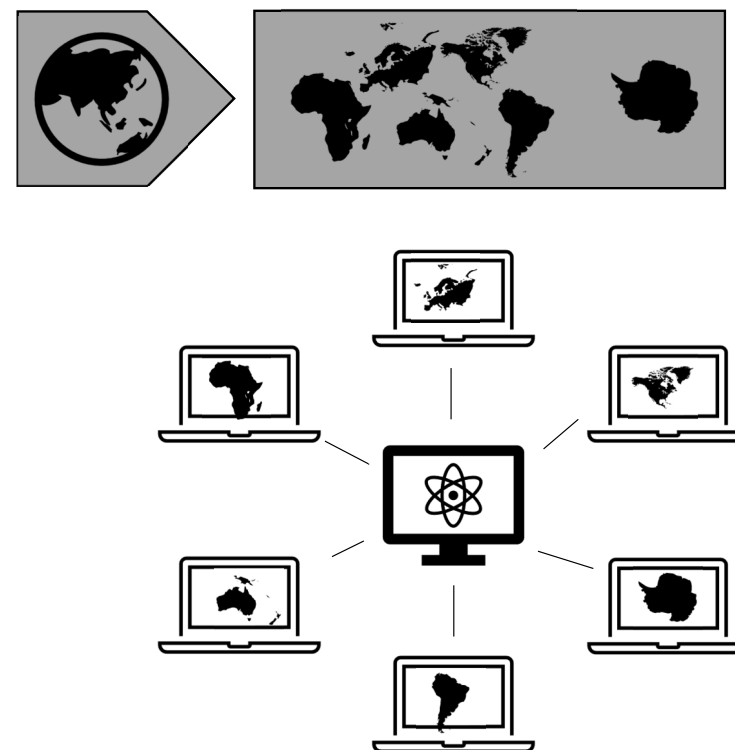


単一のパソコン



計算負荷が高い
効率性が低い

分散コンピューティング



効率性が高い

時間部分項処理

重み付き残差法

WRM

Weighted Residual Method

陽解法

安定性が**低い**

並列計算への適用性が**高い**

陰解法

安定性が**高い**

並列計算への適用性が**低い**

安定性改善できると

有限要素法で解ける問題増える

モンテカルロ法による**修正**

遺伝的アルゴリズムを適用

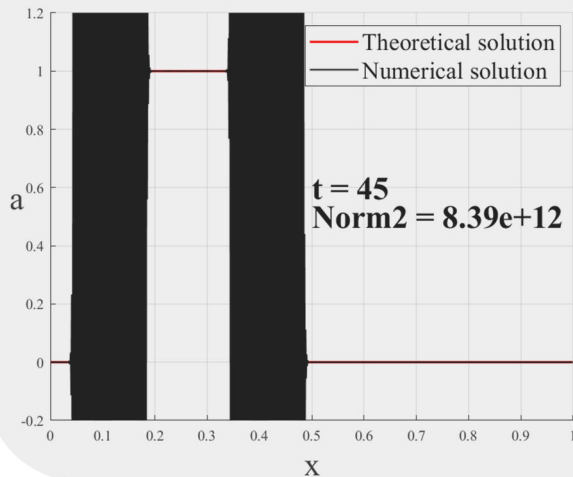
安定性に関する考察

$$\frac{\partial u}{\partial t} + c \frac{\partial u}{\partial x} = 0$$

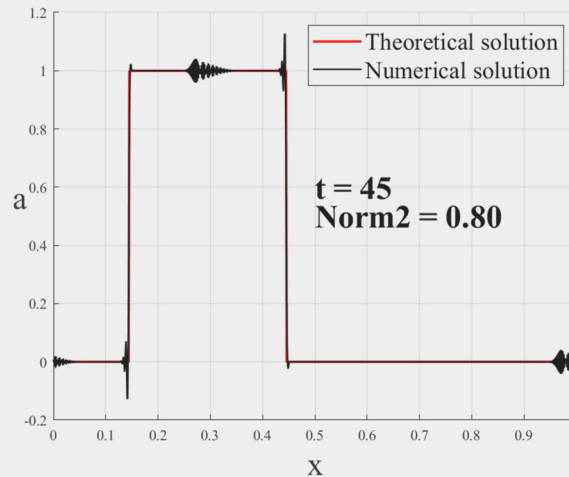
境界条件	周期境界条件
基底関数	一次ラグランジュ型
c : 移流速度	1.00
L : 計算領域	$0 \leq x \leq 1$
Δx : 空間刻み幅	0.0001
Δt : 時間刻み幅	0.0001

$$Norm2 = \sum_{i=1}^K \sqrt{(u_i - a_i)^2}$$

5時刻ステップ出力

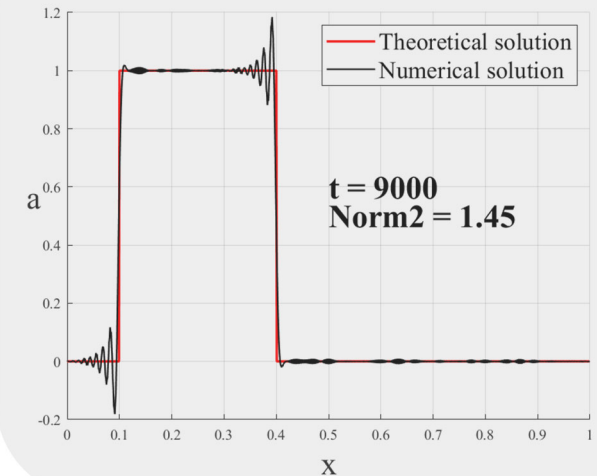


オイラー前進法



ルンゲ=クッタ法

1000時刻ステップ出力



ルンゲ=クッタ法_{5/15}

安定性に関する考察

近似解 $\hat{u}(x)$ を代入すると結果は**スカラ** (= 残差 R)

$$\frac{\partial u}{\partial t} + c \frac{\partial u}{\partial x} = 0 \quad \hat{u}(x) = a_i \psi_i(x) \quad \rightarrow \quad \frac{\partial(a_i \psi_i(x))}{\partial t} + c \frac{\partial(a_i \psi_i(x))}{\partial x} = R$$

残差 R を**重み付き残差** ϕR にして、**連立方程式化**

$$\int_0^L \phi \left(\frac{\partial(a_i \psi_i(x))}{\partial t} + c \frac{\partial(a_i \psi_i(x))}{\partial x} \right) dx = \int_0^L \phi R dx = 0 \quad \text{重み付き残差の平均ゼロの仮定}$$

$$\underbrace{\left[\int_0^L \psi_i \psi_j dx \right]}_M \frac{\partial \mathbf{a}}{\partial t} + \underbrace{\left[c \int_0^L \psi_i \frac{\partial \psi_j}{\partial x} dx \right]}_C \mathbf{a} = 0 \quad \rightarrow \quad \mathbf{M} \dot{\mathbf{a}} + \mathbf{C} \mathbf{a} = \mathbf{0}$$

安定性に関する考察

重み付き残差法

WRM
Weighted Residual Method

➔ 『重み付き残差平均をゼロとする数値解の算出』

≠

『残差を最小化する数値解の算出』

理論上、最も良い数値解？

残差を改善する余地はある？

残差に関する考察

$$Residual = \sum |R_x|$$

$$\frac{\partial(a_i \psi_i(x))}{\partial t} + c \frac{\partial(a_i \psi_i(x))}{\partial x} = R$$

$$\frac{\partial(a_i \psi_i(x))}{\partial t} = \frac{a(t + \Delta t, x) - a(t, x)}{\Delta t} \psi_i(x)$$

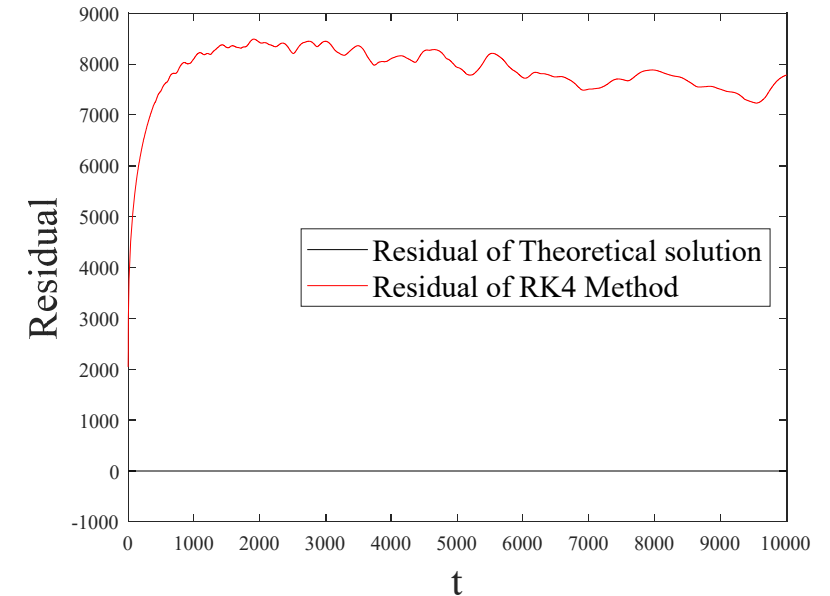
前進差分法

$$c \frac{\partial(a_i \psi_i(x))}{\partial x} = c \frac{a(t, x) - a(t, x - \Delta x)}{\Delta x} \frac{\psi_i(x)}{\partial x}$$

後退差分法

$$\frac{a(t + \Delta t, x) - a(t, x)}{\Delta t} \psi_i(x) + c \frac{a(t, x) - a(t, x - \Delta x)}{\Delta x} \frac{\psi_i(x)}{\partial x} = R$$

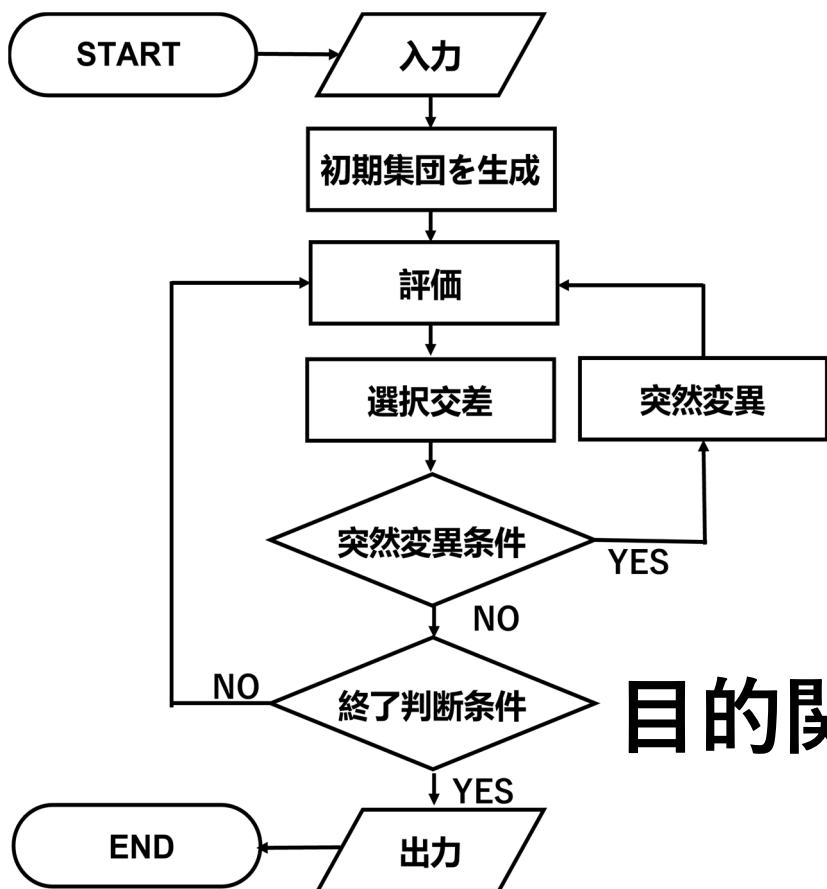
改善余地がある



理論解：各時刻においても残差値が**ゼロ**
ルンゲ=クッタ法：常に残差が存在

遺伝的アルゴリズム (GA)

遺伝的アルゴリズムは、生物進化の原理に着想を得た確率的探索アルゴリズム



修正

$$a' = a + \gamma$$

修正後の値

数値解

修正ベクトル

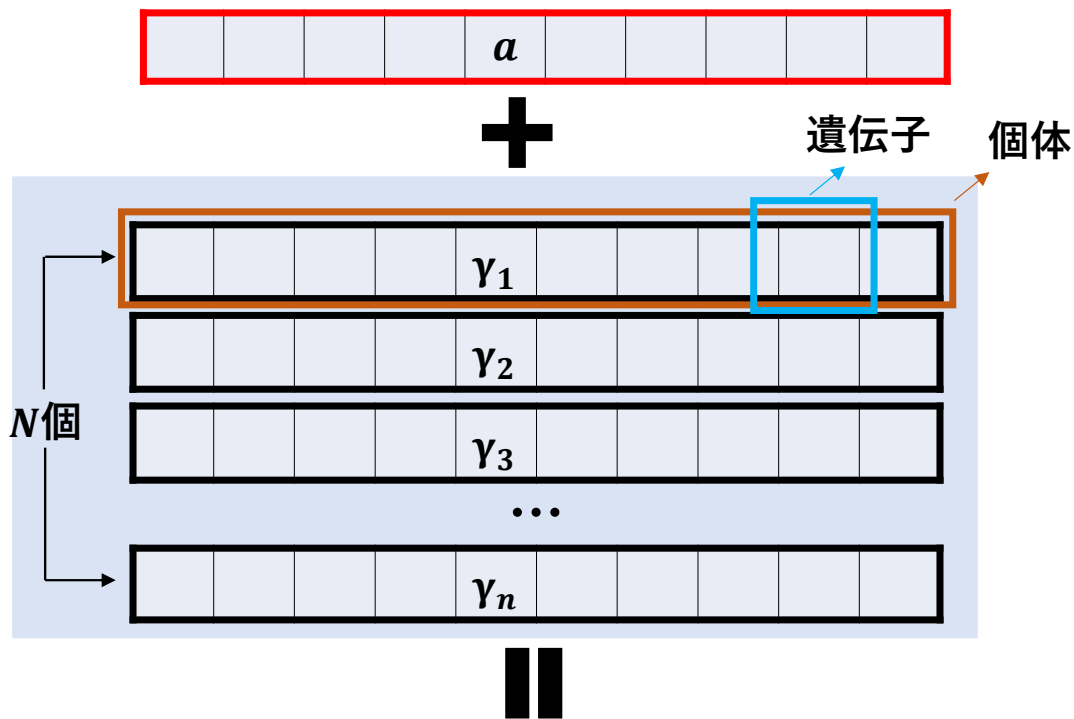
a' を残差式に代入すると残差 R' 得られる

$$\frac{\partial(a'_i \psi_i(x))}{\partial t} + c \frac{\partial(a'_i \psi_i(x))}{\partial x} = R'$$

残差 R を目的関数に代入すると適応度が得られる

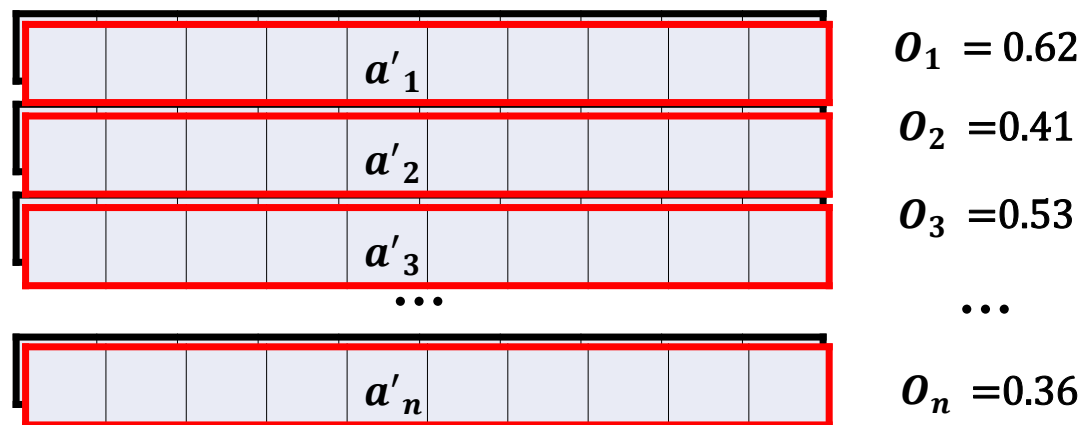
目的関数

$$O = \frac{1}{\|R'\|_2} = \frac{1}{\sqrt{R'_1{}^2 + R'_2{}^2 + R'_3{}^2 + \dots + R'_K{}^2}}$$



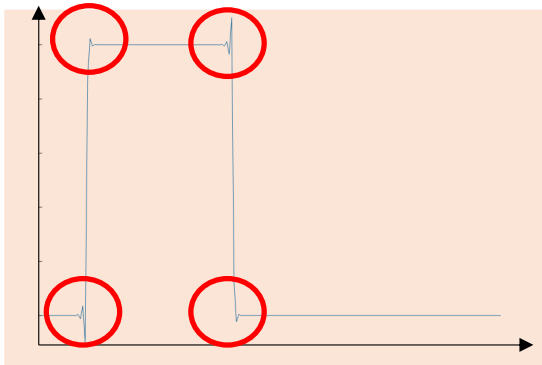
正規化による個体の選択率が決まる

$$P_i = \frac{O_i}{\sum_1^N O_i}$$



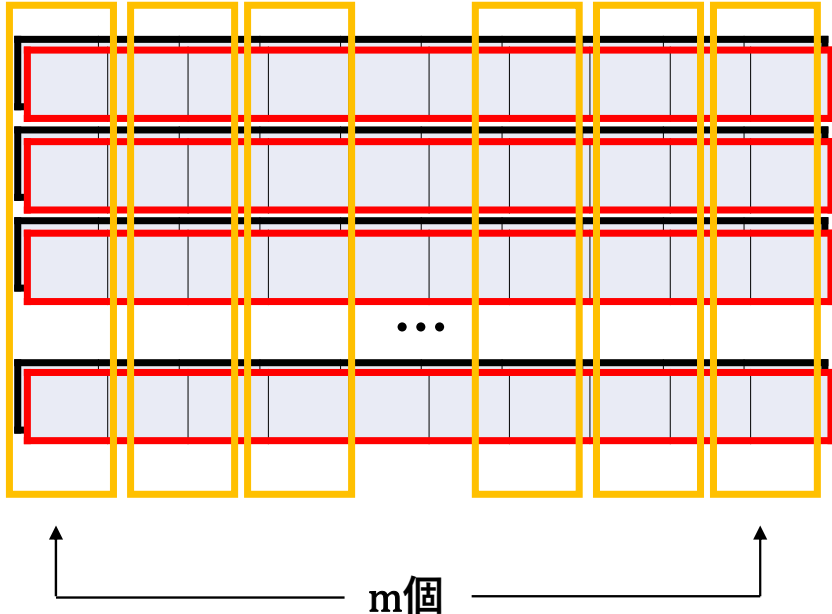
適応度 (*fitness*) が高ければ選択される確率が高い

遺伝的アルゴリズム (GA)



残差が全領域に発生するではない

閾値を**超える** 生成
閾値を**超えない** ゼロ



個体をm個 遺伝子グループに**分割**
選択をそれぞれ**グループ**ごとに行う

他の遺伝子の影響を**抑える**
ゼロ部分の計算を**省略**

数値解修正プロセス

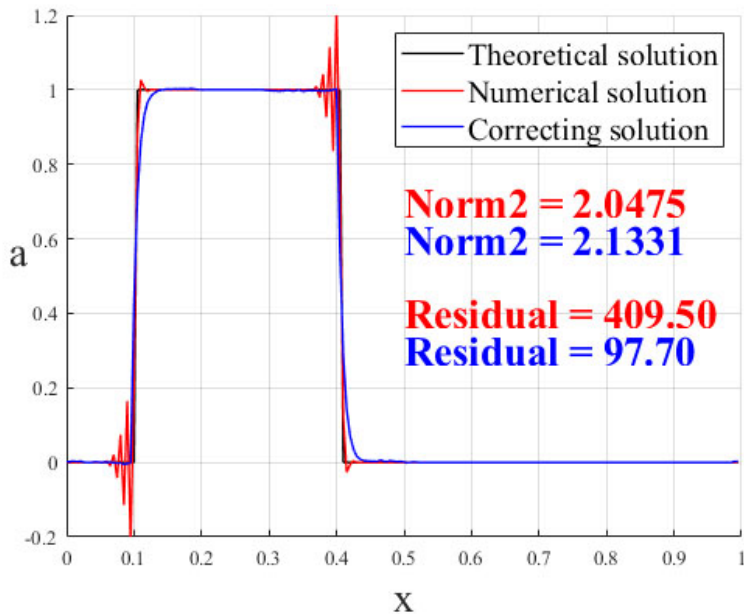
数値解計算条件

修正時刻	1st STEP
基底関数	一次ラグランジュ型
c : 移流速度	1.00
L : 計算領域	$0 \leq x \leq 1$
Δx : 空間刻み幅	0.0050
Δt : 時間刻み幅	0.0050

考察

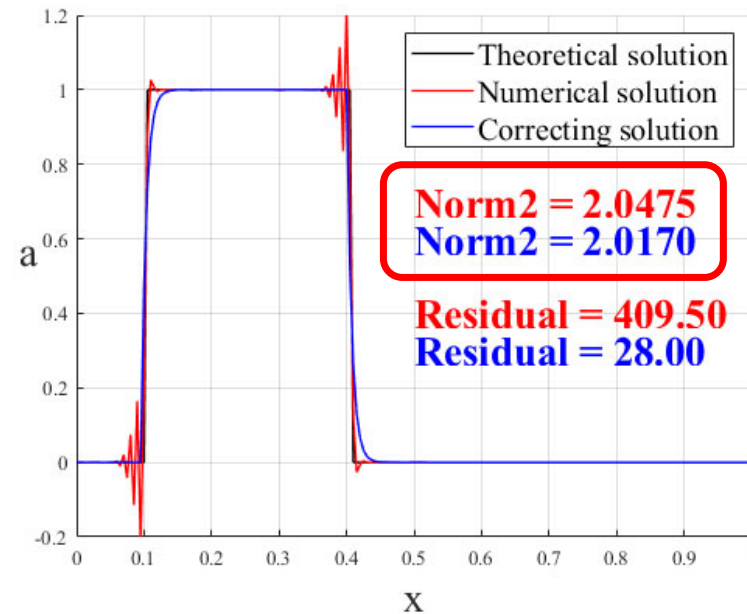
1. Residualを目的関数を減らした
2. 100分割について、40分割より理論解に近づいた
3. 40分割について、理論解から離れている数値になった
4. まだ効率的には改善余地がある。

40分割



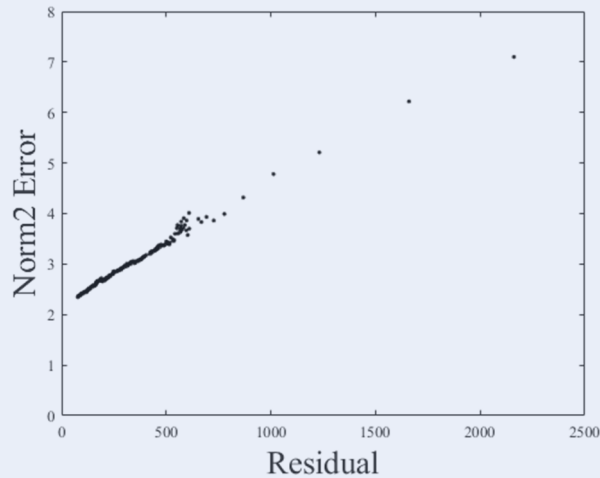
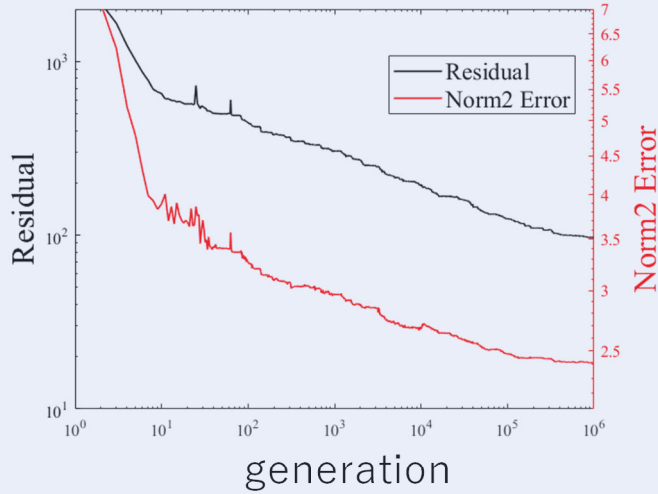
10^6 世代目

100分割

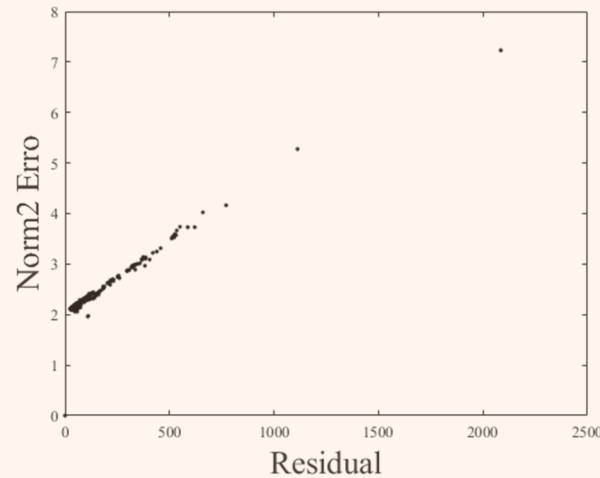
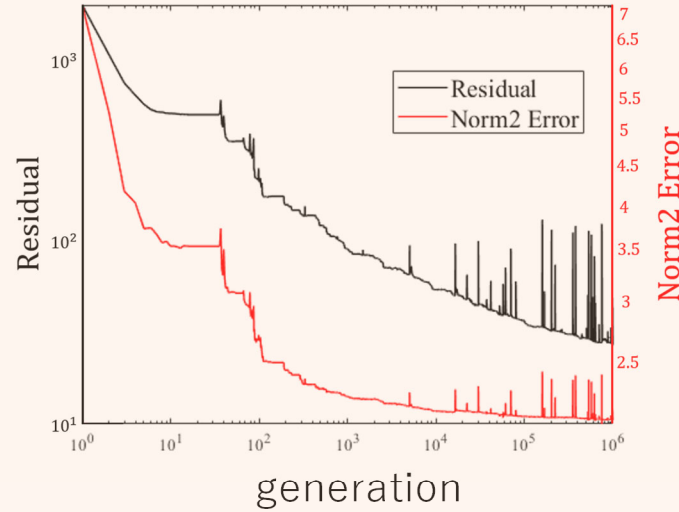


結果と考察

40分割



100分割



100分割修正効率が40分割より高い

残差と2-ノルム誤差と**比例関係**を持つ

残差に基づく修正が**可能**

まとめ

確認した結果と得られる知見

- 1) 重み付き残差法数値解に残差が残る
- 2) ルンゲ=クッタ法は前進オイラー法より高い精度を持つ
- 3) 遺伝的アルゴリズムにより，残差に基づく重み付き残差法数値解の修正が可能
- 4) 修正済み数値解の2-ノルム誤差と残差には比例関係がある。

残る課題

1) 分割数の変更

40と100以外の分割パターンに関する研究を行う。

2) 最適化アルゴリズムの変更

差分進化 (Differential evolution) の検討を行う。

3) 目的関数のデザイン

より適切な目的関数を開発する必要がある

ご清聴ありがとうございました